

今週の為替相場見通し (2018年1月9日)

総括表		先々週および先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		112.06 ~ 113.39	113.04	111.00 ~ 115.00	
ユーロ	(ドル)		1.1847 ~ 1.2089	1.2028	1.1900 ~ 1.2200	
(1ユーロ=)	(円)		134.22 ~ 136.62	136.03	134.50 ~ 137.50	
英ポンド	(ドル)		1.3348 ~ 1.3614	1.3566	1.3500 ~ 1.3700	
(1英ポンド=)	(円)	*	151.20 ~ 153.65	153.43	152.00 ~ 155.00	
豪ドル	(ドル)		0.7712 ~ 0.7875	0.7863	0.7650 ~ 0.8000	
(1豪ドル=)	(円)	*	87.38 ~ 89.09	88.90	86.50 ~ 90.00	

(データ) 先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 森田 大貴

(1) 今週の予想レンジ: 111.00 ~ 115.00 円

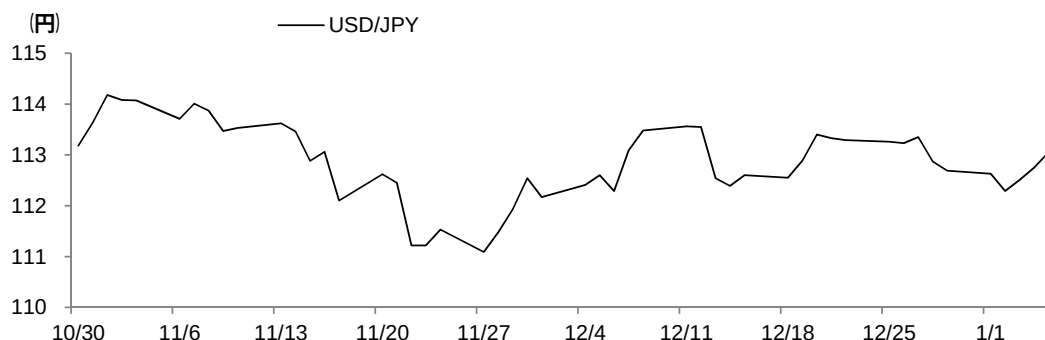
(2) ポイント [先々週および先週の回顧と今週の見通し]

昨年末から先週にかけてのドル/円相場は、年末年始に下落後、先週後半にかけて上昇する展開。12月25日に113.30円付近でオープンしたドル/円は、週前半はクリスマス休暇で多くの市場が休場となる中、同レベルで方向感なく推移。28日東京時間、米報道機関が米政府関係者の話として、北朝鮮が新たな弾道ミサイルまたは人工衛星の発射に向けた準備を進めている兆候があると報じたこともあり、年末に向けたポジション調整主体のドル売りが強まったことから112.70円割れまで下落。その後も113円台を回復することができず、軟調な株価も相まって112.47まで下落後、112円台半ばで越週した。年初1月2日に112円台半ばでオープンしたドル/円は、東京市場が年始で休場となる中、北朝鮮の金正恩委員長の発言を背景にリスクオフムードが広がること一時週安値となる112.06円まで急落。その後は米株、米金利がともに上昇したことからドル/円はやや値を戻した。3日は米12月ISM製造業景気指数が予想を上回ったことからドル買いが強まり112円台半ばまで上昇したものの、買いは続かず112円台前半まで反落。FOMC議事要旨では利上げ路線の維持と米経済について楽観的な見方が示されたことから、ドル/円は112円台半ばまで買い進められた。4日は日経平均株価や欧州株の上昇を横目に112円台後半で堅調に推移。米12月ADP雇用統計が予想を上振れる中、米株が大きく上昇したことを受け112.80円超えまで上昇。さらに、翌5日もこの流れが続き、海外時間に週高値となる113.32円をつけた。米12月雇用統計では、非農業部門雇用者数が予想を下回ったことなどから113.02円まで下落。その後発表された米12月ISM非製造業景況指数も予想を下振れたが113.00円手前では買い意欲が強く、113.04円で越週した。

今週のドル/円相場は底堅い展開を予想する。年末年始こそポジション調整が主体でドル軟調推移となったものの、足許ではグローバルに株高が進行する状況下、ドル/円については底堅く推移している。地政学リスクが強まる様子もなく、米金利の上値が押さえられ他通貨でドル売りが進む中でも、円売りの動きにサポートされた格好。昨年末にかけて実需、海外勢ともに既に相応の売りをこなしていること、米12月雇用統計こそ予想を下振れたものの、総じて好調な米経済指標が続いていることに鑑みれば、日米ともに株価が高値を更新し、商品市場も総じて堅調に推移する状況下、リスクオフの動きが続く可能性が高いだろう。今週は、11日(木)に米12月卸売物価指数(PPI)、12日(金)に米12月消費者物価指数(CPI)が発表されるほか、FRB高官の発言が複数予定されている。

(3) 先々週および先週までの相場の推移

先々週および先週(12/26~1/5)の値動き: 安値 112.06 円 高値 113.39 円 終値 113.04 円



(資料) ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 西谷 鷹

(1) 今週の予想レンジ: 1.1900 ~ 1.2200 134.50 ~ 137.50 円

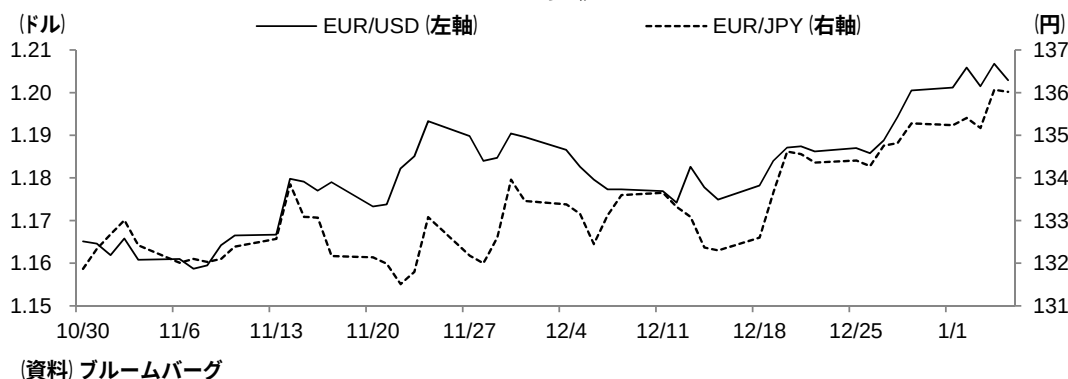
(2) ポイント[先々週および先週の回顧と今週の見通し]

昨年最終週のユーロ/ドル相場は上昇する展開。週初12月25日に1.18台半ばでオープン後、週前半はクリスマスで欧米市場が休場となる中、動意に乏しく推移。週後半は市場参加者が徐々にマーケットに戻ってくる中で全般的なドル売り地合いにユーロ/ドルは上昇。11月高値である1.1961を上抜けると1.20台に乗せて一時週高値となる1.2025をつけた。その後、やや反落して1.1997レベルで越年となった。先週のユーロ/ドルは底堅く推移。週初2日は1.20近辺でオープン直後に週安値となる1.2000をつけた。しかし、クーレECB理事が9月に期限を迎える拡大資産購入プログラム(APP)について延長しない合理的な可能性があるとの見方を示し、量的緩和縮小(テーパリング)観測が強まったことや、独12月製造業PMI(改定値)が統計開始(1996年)以来の最高値を記録したことを受けて1.20台後半まで急反発した。しかし、昨年9月8日につけた高値である1.2092が意識される中、その後は売り戻された。3日は米12月ISM製造業景気指数の良好な結果やFOMC議事要旨発表後にドル買いの流れが強まったことを受け1.20台前半まで下落。4日は1.2000近辺まで続落したものの、メルケル独首相率いるキリスト教民主・社会同盟(CDU・CSU)とドイツ社会民主党(SPD)の連立政権樹立に向けた会談の共同声明で楽観的な見方が示されると週高値となる1.2089まで急伸した。5日は徐々にドルを買い戻す動きが続く中で米12月雇用統計が発表され、強弱まちまちの結果に発表直後こそ上下に振れて1.20台後半をつける場面が見られたものの、値動きが一服した後は再度ドル買いの流れに。ユーロ/ドルは1.2020近辺まで下落した後、1.2028レベルで越週した。

今週のユーロ/ドル相場は堅調な推移を予想する。足許は良好な欧州経済指標の発表が続いており、またドイツにおける大連立樹立に向けた動きもポジティブな見通しとなるなど、欧州政治リスクも後退している。また、上述のクーレECB理事の発言に加えて、ノボトニー・オーストリア中銀総裁からは「ECBの資産購入プログラムは終了が視界に入っている。その後は、保有債券の償還額の再投資を続ける」、メルシュECB理事からは「超緩和的な政策姿勢からの脱却は慎重かつ段階的に進める必要があるとはいえ、金融政策の正常化でECBがあまりに遅く臆病になり過ぎ、後手に回ることがないように極めて注意深くあるべき」などといった発言が見られており、こうしたECB高官からのタカ派発言が年初にかけてのユーロ高の動きをサポートしているものと思われる。昨年高値である1.2092を前に一旦足踏み状態が続いているが、ECBが正常化を進める中で基本的なユーロ高の流れは継続すると考えており、今週のユーロ/ドル相場は底堅い展開になるとみている。但し、1.20の大台を超えてきたことから、ECB高官によるユーロ高牽制を懸念する声も高まっており、突発的なヘッドラインに一旦ポジション調整が進む可能性もあるので注意して臨みたい。今週は9日(火)に独11月鉱工業生産、11日(木)にユーロ圏11月鉱工業生産の発表などが予定されている。

(3) 先々週および先週までの相場の推移

先々週および先週(12/26~1/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.1847 高値 1.2089 終値 1.2028
(対円) 安値 134.22 高値 136.62 終値 136.03



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.3500 ~ 1.3700 152.00 ~ 155.00 円

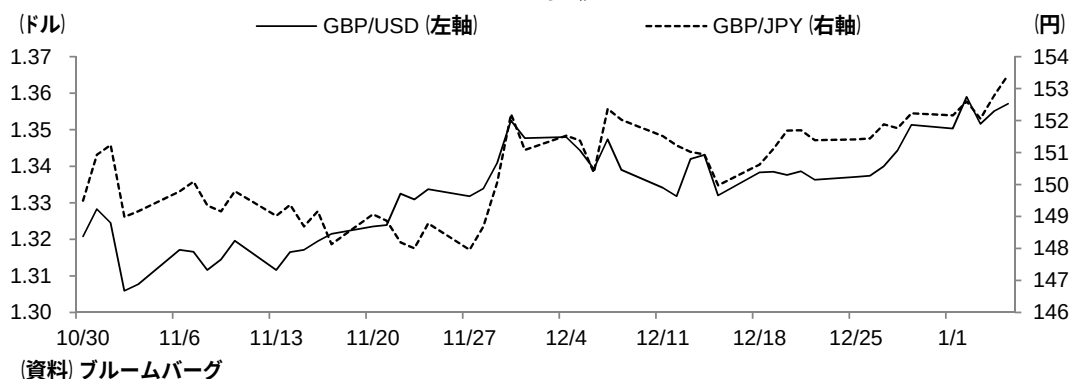
(2) ポイント[先々週および先週の回顧と今週の見通し]

先週・先々週の英ポンド相場は、対ドルで小幅上昇後横這い、対円ではほぼ一方的な上昇、対ユーロでは小幅上下動を経て概ね横這い。対円での値動きは、値幅は大きくは出なかったものの、2016年6月の英国国民投票以降の高値を更新する上昇となった。2週間と言っても英市場は7営業日だけで、休暇中の市場参加者も多く、総じて動意に乏しい小動きと言えた。英のEU離脱交渉に関しても、この間、「離脱後TPPに加盟」「バルニエ首席交渉官の(在英金融機関の営業制限に関する)警告は『はったり』」などといった観測報道は聞かれたものの目立った進展はなく、英経済指標も各種12月PMIの発表があった程度で、特段ポンドに影響を与えた様子は読み取れなかった。対ドル、対円でのポンド上昇も、対ユーロでの横這いが物語る通り、ドル側、円側の(ドル安、円安)要因による値動きと考えられた。年末までの主要通貨市場は、ドル全面安の様相で、その要因は米長期金利の低迷などに求められた。米税制改革による景気浮揚効果に対する膨らみ過ぎた期待が、年末に掛けて調整を見たなどとの思惑的な解釈がされた。年明け以降は円安基調が明確になったが、こちらは世界的な株価の堅調がリスクオンの円売りを誘ったとの解釈がされたが、株価全面高の要因については、「年初の期待感」といった曖昧な思惑以上のものは確かめられなかった。経済指標では、ほぼ唯一、米12月雇用統計が注目を集めたが、若干弱めの非農業部門雇用の伸びにドルは一瞬売り込まれたものの、結局金融市場の反応は限定的なものであった。

今週の英ポンド相場は、今しばらくの堅調推移を予想。特段ポンドを買い上げる要因があるわけでも、期待できるわけでもないが、対円で1年半ぶりの高値を更新した事実には一定の重みがある。対ドルでも同様の値動きを試す展開を視野に入れた市場参加者が大勢いる可能性は高い(直近高値の1.3659(昨年9月)を上抜ければ1年半ぶりの高値更新)。そういう思惑があるだけでも、当面のポンド下支え要因になるのではないかと。ただし、上述、「バルニエ首席交渉官の警告は『はったり』」などという発言は大いに気掛かり。交渉の常とう手段として、確かにある程度のはったりは考えられるものの、今後英側が「はったり」を前提に交渉に臨む姿勢でいるのなら、交渉の進展は覚束ないだろう。昨年3月のリスボン条約50条発動以降、英側の主観的で楽観的な見通しはことごとく裏切られてきた経緯があるからだ。中期的な視点ではあるものの、離脱交渉の不調がもたらす被害は、英側の方が(残りの)EU側が受けるそれよりもはるかに大きくなるであろう点は、肝に銘じておきたい。英経済指標では、今週、8日(月)にハリファックスの10~12月住宅価格、10日(水)に英11月鉱工業/製造業生産、英11月貿易収支などが予定されるが、市場が特に材料視する可能性は高くないものと見込む。

(3) 先々週および先週までの相場の推移

先々週および先週(12/26~1/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.3348 高値 1.3614 終値 1.3566
(対円) 安値 151.20 高値 153.65 終値 153.43



4. 豪ドル

(1) 今週の見通しレンジ: 0.7650 ~ 0.8000 86.50 ~ 90.00 円

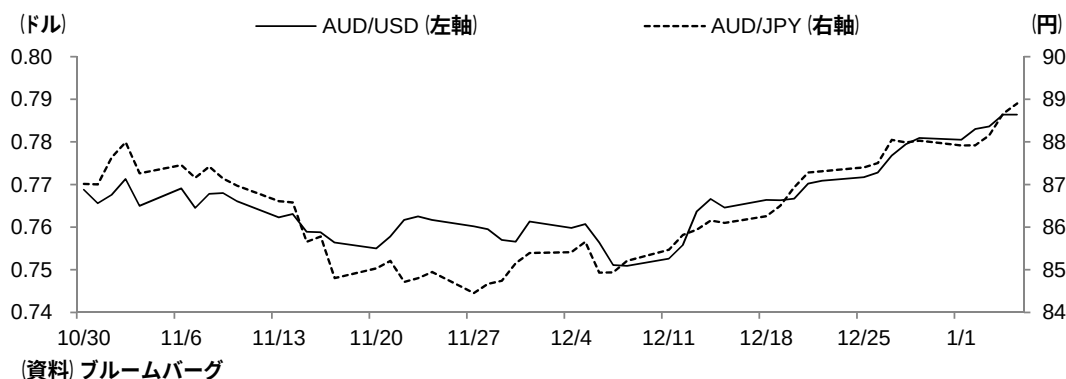
(2) ポイント [先々週および先週の回顧と今週の見通し]

先々週から先週の豪ドル相場は3か月ぶりの水準まで上昇する展開となった。週初12月26日の豪ドルは、原油価格等商品価格上昇を背景に、0.77近辺から0.77台前半に小幅上昇。27日は、米債利回り低下を受けた米ドル売りから、0.77台前半から0.77台後半に上昇。豪ドル/円も週高値88.14円まで上昇する場面もあった。28日は、世界的に堅調な株価に支えられリスク選好の動きが強まり、豪ドルは0.7810まで上昇したが、豪ドル買い一服後は0.77台後半に反落して推移。29日も、世界的に堅調な株価に支えられ、0.78近辺から12月高値となる0.7825に上昇。その後、豪ドルは値をやや落として、対ドルで0.7809、対円で88.03円で越年した。2018年年初、豪ドルは0.78近辺でスタート。日中は良好な豪州経済指標や中国経済指標にサポートされ、3か月ぶり高値0.7845まで上伸。海外市場に入り、豪ドルは0.78台前半での横ばい推移も、対円では週安値87.63円まで下落した。3日の豪ドルは、日中は3か月ぶり高値水準0.7830近辺からじりじりと0.7805まで下落。売り一巡後は、再び0.78台前半に反発。海外市場では堅調な欧米株式市場にサポートされ、0.7845まで上昇した。4日は、商品高と株高のリスクオン相場にサポートされ、3か月ぶり高値0.7866を付けた。5日は、11月豪貿易収支が▲6億2800万豪ドルの赤字と、予想外の赤字となったことを受け、豪ドルは一時0.78台前半まで売られた。しかし、海外市場に入り11月米雇用統計がやや弱めな結果となると再び豪ドル買いの流れとなり、週高値となる0.7875、対円で89.09円まで上昇。その後はやや戻して、対ドルで0.7863、対円で88.90円で越週した。

今週の豪ドル相場は徐々に上値の重い展開を予想する。今月は豪州準備銀行の金融政策決定会合は予定されておらず、引続き原油や鉄鉱石などのコモディティや株式などが買われるリスクオン相場が続くかどうかポイントとなる。中国鉄鉱石価格も上昇しているものの、特に最近原油高に支えられた面が大きく、その動向に左右されやすいと思われる。11月末のOPEC減産合意延長を機に上昇してきた原油は、年末のリビアのパイプライン爆発やイラン国内の大規模デモを受けた供給懸念から2015年6月以来となる高値圏で推移している。しかし、このデモもSNSの封鎖などを通じて鎮圧されたと報じられていることもあってイラン情勢の緊張感が和らぎつつあるため、原油高を背景とした豪ドルの上昇局面は一旦終わりを迎えるだろう。また、昨年9月以来の安値圏まで売り込まれている米ドルも、10年国債利回りが最近の上限である2.5%近辺で推移しており、このレベルでは米ドルにも買戻しが入りやすいと予想される。豪ドルのシカゴ先物ポジションはネットショートとなっている点を勘案すると、一段と上を試す場面はあろうが、上述した材料を背景に0.80台を上抜ける程の勢いはないと考える。0.79台では上値の重い展開となろう。まずは10月高値の0.7898を上抜けることができるかが試金石ではないだろうか。

(3) 先々週および先週までの相場の推移

先々週および先週 (12/26~1/5) の値動き: (対ドル) 安値 0.7712 高値 0.7875 終値 0.7863
(対円) 安値 87.38 高値 89.09 終値 88.90



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。